

六点

② 子等だけの道のあるらし秋の原

松浦かおる

自宅近くに南本宿公園、少し歩くと子供自然公園があり、よく散歩します。子供は、どの子もまっすぐに歩くことはなく、あつちにささり、こつちにもぐりしながらもちやんと元の道へ戻ります。秋の日曜日、散歩しながら、ふと、子供の頃、自分達だけがわかる道で野原を遊び回っていた事を思い出しました。今も昔も子供は変わっていないととても安堵しました。

五点

④ 身構へぬ寡黙や風の吾亦紅

佐渡谷秀一

目黒の自然教育園は、所謂公園の人口臭さを消した作りになっている。意識的に分類し植えられた植物群は、いかにも自分の意思で居場所を定めているように見える。時間があつたら、気分を替えたい時に訪れることにしている。九月、枝先に暗紅色で円頭形の花穂をもつ吾亦紅は、周りの草木より一寸背を伸ばして風に吹かれている。色形の目立つ割には、眼にうるさく映らない。いつも一言多い私としても、ありたいと思う姿である。

② ていねいな庭師の仕事 晴日和

辻 幸子

私の住むマンションは、植物がたくさん生育しています。十月、秋の日差しの中、五・六人の庭師が一生懸命作業をしていました。この人たちは、そばを通る住人たちにもきちんと挨拶をして下さり、気持ち良く仕事をしている感じが伝わってきました。そんな光景を見て句ができました。

② 去年までは父の唄ひし踊歌

柏尾のり子

北九州市門司区の実家の盆踊りでは、神功皇后に起源を持つという言い伝えの、「馬寄<sup>まぢり</sup>おどり」が踊られています。それは「くどき」という、語りのような歌に合わせて舞われるのです。父が保存会の一員として毎年「くどいて」いたのですが、今年のお盆はそれが見られず寂しく思いました。

数珠玉や一枚板の長屋門

稲葉 幸

友人が「田舎暮し」がしたいと言い出し、「家探し」のため長野の飯田に行きました際に、古いのですがすばらしい門に出会いました。(よけいなことですが) 結局、家はなく現在は、清里の奥に住んでいます。

敵島の宮司小走り台風来

藤本 友子

十月半ば、念願の敵島神社を訪れました。折りしも台風が近づいていましたが、なんとか参拝を果たしました。当日は神社の寢殿造りの床には、海水が上がってきて、風雨が強まっています。白いビニール合羽を着た何人もの宮司さんが、あわただしく動きまわっていました。私達が神社を出ると同時に、参拝禁止となり、私達が

フェリーを降りてしばらく後に欠航となりました。台風の直撃は避けられたものの、ヒヤヒヤの旅でした。

四点

① 金木犀いつきに薫る通夜帰り

佐渡谷 秀一

連想ゲーム的発想の産物である。九月の終り、日が暮れた帰宅の途中、金木犀の香にふと気が付き、足をとめる。金木犀といえば、久世光彦さんの小説（例えば『殿下』『花迷宮』）に語られたこの花の香の強烈な印象が頭に浮かび、少年時、阿佐ヶ谷住いだった同氏と、同じ杉並に居られた知り合いの大学教授の通夜へ参列した夜の思いなどが重なり「一気に」ストーリーが完成する。金木犀の香は、昔を薫り強く引き出してくれる力を持っているのだろう。

① あたらしき知事あたらしき小鳥来る

中村 朋子

今夏、東京都知事に小池百合子氏が就任。日々奮闘の様子が報じられています。彼女はカイロ大学留学時代、あまりの暑さに勉強がままならない時は、水を張ったバケツに足を漬けてアラビア語に立ち向かったとか。異国で学ぶ女子学生の不屈の精神を感じます。百合子さん、これからも、果敢な一羽の小鳥として、ひるむことなく、前へ進んでください。

出勤のメールチェックや露寒し

増田 守

サラリーマンだけでなく対人活動をしている者には、朝のメールチェックは欠かせない。一日の計画を立てる仕事始めである。バスの中でも電車の中でも、みな黙々と。

後の月酔いどれ雲が漂よえり

京林 眞壽

後の月の季語を見て作りました。漂う雲と酔つてふらふら歩く己の影を重ねております。

ジーンズ屋は代官所跡つた紅葉

藤本 友子

倉敷の町を散策した時の句です。倉敷は、紡績産業が下火になった時、ジーンズ生地に注目しました。なまこ壁の続く蔵屋敷街の一角に代官所跡があり、モダンな建物の中でジーンズの様々な商品が売られていました。白壁に這う色づいた葛が印象的でした。

祝ぶ子の産毛艶やか七五三

稲葉 幸

近くに姪が居り、我が家には、孫が居ませんので何かと手を貸したり、世話をいたします。姪の両親と同じ動きで、楽しみです。これは、五歳、三歳、お宮参りと全部まとめて一日で済ませました。